

民族舞踊文化



No. 13

2001年5月14日

THE MAYUZUMI FOUNDATION FOR TRADITIONAL FOLK DANCE

財団法人 黛民族舞踊文化財団

〒107-0052 東京都港区赤坂3-10-3 黛ビル4F TEL 03-3583-3633(代)
FAX 03-3583-3639



迪慶藏族自治州中甸県の劇場で日中舞踊交流公演を終えて
2000. 6. 6

新しい世紀の民族芸能 交流へ向けて

財団法人 黛民族舞踊文化財団

理事長 犬丸 直

廿一世紀がいよいよ到来しました。時の流れに淀みはなく、新しい世紀が来たからといって、そのことだけによって物事が新しい展開をするわけではありません。しかしこの大きな節目にあたり人々がおのずから心を引き締め、過去を反省し、新しい進展へと思いをめぐらすのは、自然でありましょう。

前世紀の最後をしめくくった昨年には黛民族舞踊文化財団の第6次訪中団が、昆明を中心とした各地において、たいへん熱意のこもった歓迎とおもてなしを受けて、両国の民族舞踊の交流を行ってまいりました。その様子は次頁以下に報告されているとおりですが、故黛節子先生の憶い出がなお深く、かの地の人々の心に残っている様子がうかがわれ、今さらながら先生の御業績の大きさに打たれます、西紀二〇〇〇年を期して第二回の世界の民族芸能の祭典（ワールドフォークロリアード）が日本で開催されました。その“集い”のプログラムは7月26日から30日まで渋谷を中心とした東京の各所で、“交わり”のプログラムは長野、新潟、島根、北九州などの各地で、世界のさまざまなグループが参

加して行われました。世界には、こんなに多彩な各種の民族芸能が数多く受け継がれて現存しているのかと、目を見張られる思いでした。

このような祭典に比べると黛舞踊団の中国民族舞踊家たちとの交流は、まことに地味ですが、両国の舞踊家たちの心の中深くに相互の親近感をきづき上げてきており、両国とも古い時代からの伝統に根ざす民族舞踊の遺産を無限に蔵していることを知り、理解し合うようになっています、まさに「継続は力なり」の格言のとおり、ますます相互理解が深まり、高まることが期待されます。

今年は中国側から第9次訪日代表団を迎えることになりませんが、6月30日から7月11日までの日程がほぼ固まっております。外形的にはほぼ例年どおりのスケジュールですが、両国のもつ豊富な民族舞踊の財産の中から、今回はどのような新しい発見があり、お互いに心を跳らせるようになるか、期待が持たれます。

黛民族舞踊文化財団第6次訪中団日中舞踊交流会

2000年5月31日～6月10日

団 長	大 野	晃
団 員	黛	今日子
	黛	莉 香
	黛	真 也
	平 出	圭尹子
	伊 藤	みつ子
	樋 口	むつみ



麗江・玉泉公園の鎖翠橋



世界遺産の麗江古城

《黛民族舞踊文化財団第6次訪中団》スケジュール

2000年

- 5月31日（水） 昆明着、雲南省舞蹈家協会主催歓迎会
- 6月1日（木） 麗江主催の歓迎会
- 6月2日（金） 雲嶺劇場で麗江県民族歌舞団と共に
日中民族舞踊交流公演
- 6月3日（土） 黄山郷文龍閣で日中民族舞踊交流公演

- 6月4日（日） 自然保護区森林公園玉龍雪山景区で少数民族の踊りを見学
- 6月5日（月） 中甸、迪慶州人民政府董副州長主催歓迎宴
- 6月6日（火） 中甸、「香格里拉」賽馬節（競馬祭）に参加
迪慶州の劇場で日中民族舞踊交流公演
- 6月7日（水） ラマ教の「帰化寺」を参観
- 6月8日（木） 「碧塔海」に行き、原始林の中に咲く花を観賞、木道を歩き
帰りは馬で戻る
- 6月9日（金） 中甸、白水台地区（ナシ族の発祥地といわれる）を参観
- 6月10日（土） 昆明市にて雲南省舞蹈家協会主催の歓送会

5月31日（水）

篠民族舞踊文化財団訪中団一行7名は、羽田発7時30分日本エアシステム513便で関西空港に行き、10時5分発日本エアシステム233便に乗り換えて約4時間30分の空の旅を終え、中国時間13時50分に昆明到着、雲南省舞蹈家協会の方々の出迎えを受け昆明飯店に向かう。

午後6時より雲南省文聯主催の歓迎会が開かれる。雲南省文聯副主席那家佐先生、雲南省舞蹈家協会前常務副主席劉金吾先生、同協会副主席馬文静先生、同副主席劉太平先生、同副主席李如春先生、同副主席趙恵和先生、同秘書長張亜錦先生、同常務理事鄧輝先生、同理事で南亜風情園芸術団団長秦竹芬先生、昆明七彩雲南芸術団団長魯麗先生方が出席される。その後秦竹芬先生主催の怡沁園での歓迎会でも南亜風情園芸術団の「民族ショー」を見せていただき旧友と楽しい交歓の時を過ごす。



昆明の市街地

6月1日（木）

今日から長い旅が始まる。今回は張先生、聶先生の計らいで、マイクロバスが用意される。運転は袁朝紅さんという「雲南省政府招待処」の専門の方なので運転技術も抜群で、皆安心して旅行を楽しむ事ができた。袁さんは一行ともすぐ仲良しになり、10日間、共にたのしい時を過ごすことができた。

7時30分、朝食後に出発。滇緬公路（ミャンマーに通じる道）に平行して走っている高速道路を、美しい山並みを見ながら進むと右側に高い建物群が見えてくる。戦後、まもなく繁栄をむかえた日本を思い出すような光景である。

長いトンネルを抜けると下関。ここから大理まで21キロメートル。窓の外は田園風景が続く。5時間かかって大理の周城に到着。午後2時、運転手の知人の殷さんが経営する「殷家楼」で白族料理をごちそうになり、再び車中の人となる。石ばかりの山、赤土の村、山から山を越えて午後6時頃やっとう麗江に到着した。メインストリートのそばの「華興酒店」に泊まる。到着後、着物を着て午後7時から森龍飯店で麗江県委、県政府、県文化局の主催した宴会に参加。団員一同着物姿で出席。



麗江に通じる高速道路



麗江森龍飯店での歓迎パーティ

県委宣伝部長和佳瑞、県文化局局长黄乃鎮、雲南省舞蹈家協会理事李紅伝、麗江地区舞蹈家協会理事崔雲、県歌舞団団長和浄泉、雲南省舞蹈家協会会員秦国華等諸先生方の熱烈な歓迎を受ける。文化局長の黄先生が日本の和服に非常に興味を示され、明日麗江古城を見学する時には必ず和服を着てほしいと強く要請される。街中を歩くので全員揃いの浴衣姿で。

6月2日（金）

世界遺産の麗江古城「四方街」を散策する。民族衣装や「東巴文字」の印鑑や特産品の溢れる街を歩き、伝統的なナシ族の建築群「木府」を見学する。



水の都麗江

標高3000メートル以上の高原の街で動作の激しい踊りができるかどうか不安だったが一同元気に踊ることができた。観客も大勢で拍手の音も大きく、特に「越中おわら」のデュエットの場ではひときわ大きな拍手を受ける。踊りは言葉や民族の違いを越えて直接人と人の心を結びつけるものだと感じる。

6月3日（土）

午前中、東巴博物館で東巴文字の本などを求め、中国茶の作法などを楽しむ。玉泉公園は絵ハガキのような公園で、池の中の魚は手をたたくとたくさん水面に顔を出す。

午後は郊外のナシ族の村里のある「黄山郷」を見学しながらの合同公演。屋外で踊る予定だったが、天候が悪くしばらく様子を見る為、きれいな庭のあるナシ族の家で一同休息タイムをとる。那先生はこれも交流

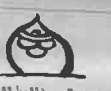
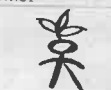
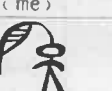
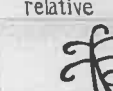


麗江古城の四方街にて

のひとつだと言われ中国のルールでマージャンを提案。結果は大野常務理事の一人勝ち。

昼食は「水の都」といわれ、800年の歴史を持つ古城の中心「大石橋」のそばの「麗江第一家」という食堂でとる。午後2時にホテルを出発。麗江県民族歌舞団の劇場「雲嶺劇場」で舞台稽古。驚いたことは今は迪慶州文聯の副主席となっている特姆先生が1988年に来日したとき黛前理事長と一緒に東京で写した時の写真が劇場にかかげられていたことである。

すぐに舞台の支度に取りかかる。

pictophonetic character		
		
[to ²²] 坡 slope	[ŋv ²² lv ²²] 雪山 snow mountain	[ko ²²] 坪 level ground
		
[dzi ²²] 走 walk	[sɿ ²²] 父亲 father	[zo ²²] 男人 man
		
[ŋə ²²] 我 I (me)	[zv ²²] 仇敌 enemy	[ko ²²] 亲戚 relative
		
[ka ²² le ²² tsy ²²] (人名) person's name	[ʒə ²²] 柱 pillar	[la ²² ka ²²] 白杨 white poplar

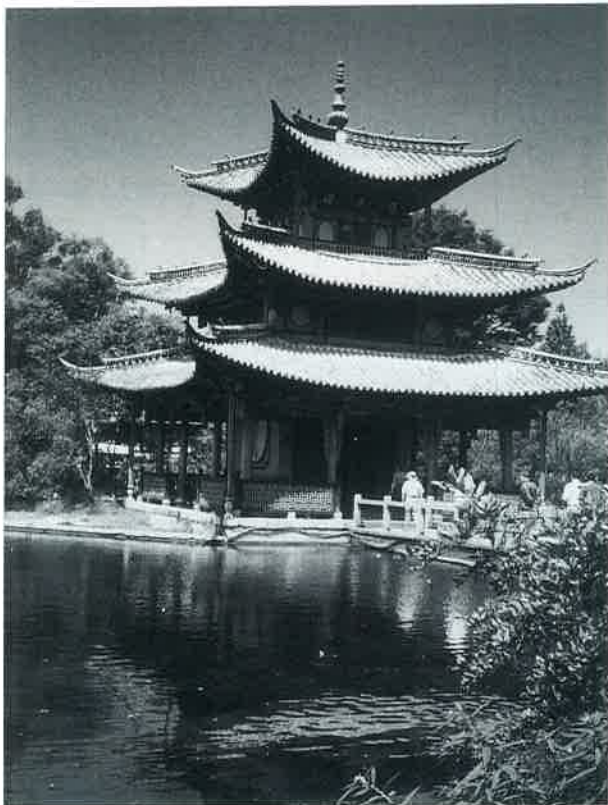
麗江地区ナシ族の東巴文字

雨がやんだので「花笠踊り」を踊り、ナシ族も伝統的な踊りを披露して舞踊交流を行う。夕食は黄山郷の文龍閣でナシ族の家庭料理をごちそうになった。

6月4日（日）

玉龍雪山へ行く予定だったが、天候が悪いので上までは登れないと言われ、山の中腹の雲杉坪（標高3400メートル）へと向かう。山麓まで16キロメートル。先ず朝市を見る。赤ジャガイモ、サツマイモ、カブ等並べてあるものは日本の野菜とほぼ同じだがこちらの方が豊富で新鮮な感じがする。

山の麓からリフトで15分登り、それから木道を2キロメートル歩いて、「自然保護区森林公園玉龍雪山景区」に到着、ここで少数民族と一緒に踊ったり写真をとったりする。自然牧場を抜けて、原始林を抜け、わらびや高山植物、雲南松（海拔2500～3000メートル）や杉を鑑賞しながら馬で帰路につく。昼食は途中「玉水寨」でとる。玉龍雪山の見えるパノラマの様な眺めの良い「光臨」で野菜、豆腐等の料理に舌鼓を打つ。



麗江・玉泉公園



麗江黄山郷の文龍閣で ナシ族の踊り

6月5日（月）

午前9時中甸に向け出発。リンゴ畑をぬって走る旧道をたどり、麗江の町や玉龍雪山を後に見て180キロメートル、金沙江（揚子江の上流）を右に見て山道を上ったり下ったり。

雲南省の中甸へ行く道の分岐点は金沙江の橋。ここを渡るとチベット自治州。金沙江を右に見て、採石場をぬけて……、虎跳峡の「橋頭鎮」にて昼食。

いくつの山を越えたのかわからないが、中甸への道はずっと下り坂が多い。中甸に着く途中、迪慶州人民政府の皆様が出迎えて下さって祝い唄と祝い酒と祝い布をいただき皆首に掛けて再びバスに乗る。

きれいなツツジやその他いろいろな高山植物が花の海のように咲いている。途中バスから降りて写真をとる。

午後4時頃中甸に到着。州賓館に泊まる。旧くて静かなホテル。このホテルで迪慶州人民政府副州長董先生、州文化局副局長蔡武成先生、州文化局芸術科長彭天雲先生、州文聯副主席特姆先生、州群芸館副館長張中華先生方の歓迎接待を受ける。標高の高い高原の街に着いたので一同早めに休む。1988年に日本を訪れた特姆先生、昨年来日された和文華先生と再会する。

6月6日（火）

中甸の大事な行事「中甸^{ジャングラ}香格里拉賽馬節」（競馬祭）に参加する。これはチベット族の民族の英雄ケサル王の時代に盛んだった乗馬競技にちなんだお祭り。貴賓として主席台に座って競馬祭りの開幕式が始まるのを待つ。

風が冷たく、かなり長時間待たされたが、やっとはいじまり少数民族の踊り、馬のショー、雄大な競馬場ですばらしい演技を見た。競馬場の周りの山腹には大小さまざまな白いテントが張られている。民族衣装をまとったチベット族、イ族、ナシ族の老若男女が家族そろって祭りの間たのしむレクリエーションの場の様だ。

午後は州の劇場で交流公演、夜8時30分に公演開始、観客は麗江の時より少ない、競馬祭のため皆町で一晩中踊っているのだそうだ。



麗江古城

6月7日（水）

9時出発ガダンソンザンリン寺院（松贊寺・帰化寺）ラマ教のお寺。山腹に厚い壁で囲まれた山城のような雄大な建築群、長い石段を皆頑張って登って見学した。

ラマ教の老僧よりジュズをいただく。

午後伊拉草原で皆馬に乗って過ごす。白い建物はハスの花のようになっていた。松の枝をくべて自分の願い事を祈り、楽しく遊ぶ。ホテルに帰って市内散策。夜チベット族の劇場で合同公演。終演後、バター茶をごちそうになる。



麗江黄山郷でのナシ族の踊り

6月8日（木）

午前8時30分、美しい湖の「碧塔海」にバスで行く。木道で下り坂。この湖の周りほとんどが原始林。きれいな花も咲いていた。昼食はチベット族の方達が用意してくれた野外パーティー形式のバーベキュー。焼き餅の中に肉・ソーセージを挟み唐辛子を山ほどかけてハオチー、ハオチーといってひとときを過ごす。

ボートで湖を一周して、上陸したらスコール。運よくぬれずにすんだ。帰りは馬に乗って戻る。

白い日本の桜に似ている山柳花（樹）がきれい。



ガダンソンザンリン寺院（帰化寺）ラマ教の寺

6月9日（金）

朝7時30分出発、中甸の方々・中でも特姆先生が「黛先生、黛先生にお逢いしたかった」と涙をためていた姿を今でも思い出す。中甸に別れを告げ麗江に戻る途中に、名勝の白水台に寄る。独特の岩は自然が長い年月をかけて造り上げたものでミルク色の岩石が溪流に洗われて本当に不思議な光景。白水台地区はナシ族の発祥地として民族衣装や習慣や言葉など麗江と少し違いがあるという。ここが本当の東巴だと自負していた。小劇場で踊りを見て一緒に踊る。

最も感動したのは世界的に有名な虎跳峽の見学。長江の流れが最初に大きくカーブする所だという。「下虎跳」－「中虎跳」－「上虎跳」、約38キロメートルの間、左側は玉龍雪山、右側は哈巴雪山、真中は有名な金沙江。川の底から突き出た切り立った山々は一層きびしさを増す。まっ黒い巨岩の間から沸き出した泉が岩壁を伝って流れ、岩を黒く染めている。山頂までの高さは約4000メートルで、壮大な眺めである。



中甸に向かう途中の虎跳峽



麗江地区での歓迎パーティ



黛訪中団と麗江の友人たち

麗江より大理市、鶴慶県へと600キロメートルも続く高速道路、行く手は果てもなく田園風景が広がる。

夕方麗江の華興酒店に到着。第5次訪日団として来日した和寿春先生、施松建先生達と再会を喜び合い、麗江地区文化局副局長楊一奔先生、杜先生をはじめ皆様の接待を受ける。

6月10日（土）

時間が経つのは早いもので昆明へ戻る日となった。

途中大理・ペー族村の周城さんの所で藍染めの製作工房をたずねる。楚雄イ族自治州にて昼食。夕方雲南省文聯の党組書記副主席李仕良先生、文聯党組織成員副主席劉鴻渝先生、那先生他、張先生、鄧先生の招待を受ける。素晴らしい旅の話題ばかりで話ははずみ昆明最後の夜を楽しく過ごす。

6月11日（日）

午前中買い物、昼食は昆明飯店で範社長に雲南名物料理「過橋米線」をごちそうになる。お世話になった方達に別れを告げ、再会を約束して15時10分、JAS 232便昆明発の航空機で関空へ向かう。

関空で乗り換え羽田へ23時10分着、10日間の充実した日中舞踊交流会も無事終了した。

第6次訪中団のプログラム

1. 花笠踊り
2. 千鳥節
3. やゝこ踊り
4. 上り口説
5. 越中おわら
6. 祝い舞



麗江古城を参観する大野団長と訪中団一行、ナシ族の人々

第6次訪中団

香格里拉（シャングリラ）——桃源郷——訪問の旅

大野 晃

日本中国文化交流協会の力添えを頂き、1985年から始めた中国雲南省文学芸術界联合会（雲南省文聯）並びに雲南省舞蹈家協会と黛民族舞踊文化財団との隔年交流事業は、途中黛節子前理事長が亡くなられたことで一次中断したが、1997年に再開され昨年で、第6回目の訪中交流公演が実現した。今回はジェームス・ヒルトンの小説に描かれた桃源郷とも言われる香格里拉（シャングリラ）、即ち雲南省の西北部、麗江納西（ナシ）族自治州と迪慶蔵（チベット）族自治州を訪問、納西族、蔵族との交流を行なった。いずれも3000メートルを越える高地の旅、出発前聊かの不安を感じないでもなかったが、中国側の暖かい配慮で非常にゆとりのある日程が組まれ、素晴らしい体験をすることが出来た。省都昆明からミャンマーに通じるハイウェイ、滇緬公路を走るのだが、標高5000メートル級の雪山の峰々に囲まれ、高山植物の絨毯を敷きつめたような高原の眺めは正に香格里拉（シャングリラ）と称ぶに相応しい光景。世界文化遺産に登録された麗江古城の街の佇まいの素晴らしさは勿論、街の眼前に聳える玉龍雪山の中腹、標高3400メートル地点までロープウェイで登った事など貴重な体験の連続。その間、麗江県民族歌舞団との日中交流公演や納西族「黄山郷」での舞踊交歓、そして特有の絵文字文化を持つ東巴（トンパー）納西族とも触れ合い、一同共に楽しく踊った。

旅の後半は麗江からさらに200キロメートル奥の中甸に向かい蔵（チベット）族の祭り、香格里拉賽馬節（シャングリラ・競馬祭）に参加する。蔵族の英雄ケサル王の時代に盛んだった乗馬競技に因んだ祭りということで、近在からも多数の人が集まり、パレードと乗馬競技が華やかに繰り広げられ、賑わいは夜遅くまで続いた。

何れにしても数多くの思い出ある旅であったが、全行程行動を共にし、親身に我々の面倒を見て下さった、雲南省文聯の那家佐副主席、雲南省舞蹈家協会の張亜錦秘書長、同じく鄧輝常務理事の諸先生には、改めてお礼を申し上げたい。

（おおの・あきら 黛民族舞踊文化財団常務理事）
日本中国文化交流協会発行「日中文化交流」より転載

第6次訪中団

麗江、中甸（チベット）

訪問の旅写真集



麗江古城にて



文聯の那先生・雲南省舞蹈家協会張先生



文聯の歓迎会にて那先生、聶先生、大野団長



麗江県政府による歓迎パーティ



麗江歌舞団の「雲嶺劇場」で日中民族舞踊交流公演



中甸の合同公演でのチベット舞踊



麗江・雲嶺劇場での祝い舞



中甸の合同公演でのチベット舞踊



麗江・雲嶺劇場でのやゝこ踊り



金沙江風景



中甸の白水台のナシ族と共に



黨訪中団と麗江の友人達



中甸の伊拉草原にて



大理・白族の村の藍染め工房

国の重要無形民俗文化財

にし も ない

西馬音内盆踊り取材記

西馬音内盆踊りの起源は記録されたものが全くなすべて言い伝えによるものだと言われている。正応年間（1288～93）に源親という修行僧が蔵王権現（現在の西馬音内御嶽神社）を勧請し、この境内で豊年祈願として踊ったものといわれ、又一説には慶長六年（1601年）西馬音内城主小野寺茂道一族が滅び、土着した遺臣たちが主君をしのび、盆の16日～20日まで宝泉寺（西馬音内寺町）境内で行われた亡者踊りと合流し、天明年間（1781～1789）に盆の16日から踊られるようになったといわれている。

にぎやかでつやっぱい「かんげ」は、月光の夜を飛ぶ雁の姿を連想した「雁形」、仏教伝来の「勧化」、現世の非運をいたみ、来世の幸運を願う「願生化生の踊り」から来たものといわれている。

「かんげ」は亡者を連想させるため、黒いふく面、ひこさ頭巾をかぶり、音頭は端縫いの衣裳で編み笠をかぶる。衣裳は四種も五種もの絹布を配色よく縫い合わせ、故郷に生きる女たちの追憶にふけるという夢もあったことだろう。

流麗に、幽玄に、優美に、700年の舞いに秋田県羽後町の人々に踊り継ぐ歴史を感じさせられた。



街頭での盆踊り



西馬音内の盆踊りの衣装

2000年8月16日～20日、大野先生と私共舞踊団員は秋田県羽後町商工観光課の紹介でかつて黛節子先生が取材されたという幽玄の世界に盆の1日を過ごし、西馬音内盆踊りの会長松谷祐子先生の稽古場で踊りの指導を受け、西馬音内城跡、歴史民俗資料館を見て山形新幹線で帰途についた。



盆踊りの取材風景

「香取神宮お田植祭り」取材記

伊勢神宮、住吉大社のお田植祭りと並んで『日本三大田植祭』のひとつにかぞえられる「香取神宮お田植祭り」を取材するため黛智英、黛莉香、藤原明人の3名は平成12年4月1日に千葉県佐原市の香取神宮に向かった。東京駅から成田線に乗り田園風景のひろがる中を一路佐原市へ。駅からタクシーに乗り途中運転手の話す伊能忠敬邸など佐原の名所の説明等を聞いているうちに香取神宮に着く。一の鳥居をくぐり参道を登ると道の両側には植木や花、道具、小物等を売る露店が並んでいた。二の鳥居、三の鳥居をくぐると荘厳な拝殿が現れる。その拝殿の前の神庭では神官や巫女たちが斎竹を立て、注連縄をめぐらせて四隅に四神旗を飾るなどして祭りの準備に余念がなかった。拝殿入口の柱に今日、4月1日は耕田式、4月2日は田植式と書いてあった。すでに多くの人々がカメラやビデオを手に式が始まるのを待っていた。

しばらくして祭典が始まる。はるか下手の神徳殿から稚児や五月女手代が持つ大花笠を先頭に祭りの行列が続き、神庭の祭場に入る。宮司が祝詞をあげた後、納曾利、大悪魅、姥が稚児の右側正面から薙刀で三度祓いを行い、続いて鎌行事、鋤行事、鍬行事がとり行われる。その後牛方所役が耕田、田舞を奏し、稚児が舞を舞う。五月女手代が植初行事の舞を奉納し、祭典が終了する。

黛財団では平成8年6月に大阪市・住吉大社のお田植祭りを取材し、平成11年7月には第8次訪日団と共に三重県磯部町の伊雑宮のお田植祭りを取材しているので今回の取材で日本三大田植祭をすべて訪れたことになる。



植初行事の舞の奉納



祭りの行列



牛による耕田式

舞踊作家協会「伝統と創造」に参加

2000年11月1日（水）ティアラこうとうにて大野晃芸術監督のもとで日本の美・三つの視点というタイトルで地唄舞とパントマイムを基に表現枠を拡げ、国際的規模で活躍する出雲蓉先生の日本舞踊の粋。長年のニューヨーク生活から再び日本に活動拠点を移した現代舞踊家馬場ひかり先生の描く東洋のイメージ。民族舞踊の舞台芸術化を試みユニークな作品を数多く残した故黛節子先生の遺作集を受け継ぐ黛民族舞踊団による日本の民族舞踊。

三つの異なる視点で舞踊表現の多様性をパラレルにプログラム。

出雲蓉作品	黒髪・大津絵・ブラームスによる雪
馬場ひかり作品	蓮華・潮のみち
黛節子作品	やゝこ踊り・越中おわら・祝い舞

ジノ一族博物館建設へ

当財団が資金面で協力し、雲南省シーサンパンナのジノ一族郷で建設が進められてきたジノ一族博物館は、このほど建物がほぼ完成し、防水施設の工事を残すのみとなった。現在、雲南民族博物館の職員も加わって展示物の収集が精力的に進められている。展示物の内容は下記の通り。

ジノ一族山地理区域図、ジノ一族村落分布図

採集	採集対象の植物の標本、採集に使用するすき、かご等の工具、採集に従事している女性たちの写真等
狩猟	いしゆみ、矢、捕鳥用の道具、火薬銃、弾丸、火薬筒、落とし穴や山中での狩猟の様子写真等
焼畑	焼畑農業に必要な刀、斧、すき、くわ、鎌、種まき器、脱穀具、種子の標本等
紡績	綿花の標本、わた摘みの風景、女性の機織りの様子、染色植物等の写真
服装	民族衣装（男子、未婚女子、既婚女子）、男子服背面の図案、刺繍した布等
建築	ジノ一族の村の様子、民家の建物の写真等
宗教	狩猟神や穀物神の祭祀台（復元模型）、原始宗教（村の神、神木）の写真等
歌舞芸術	太陽鼓、竹筒、三弦、口弦等の楽器、太鼓舞や祭日の写真等

この他に当財団とジノ一族との民族舞踊を通じた交流を記念して黛節子前理事長がジノ一族郷で踊った時の写真等が展示される予定である。



シーサンパンナ・ジノ一族郷で完成間近のジノ一族博物館

黛民族舞踊文化財団、日本大学芸術学部

演劇学科の演劇資料展に

日中民族舞踊交流の資料を提供

昭和60年にはじまった黛民族舞踊文化財団と中国雲南省舞蹈家協会との民族舞踊交流公演は、平成12年までに訪中を6回、招聘8回の計14回となった。

過日開催された日本大学芸術学部演劇学科創設五十周年記念・第二十七回演劇資料展「現代日中演劇交流の軌跡」にその間の資料、写真等を提供した。

日中舞踊交流会記録

	訪 中 記 録	招 聘 記 録
昭和60年（1985）年	第1回（4月5日～4月17日） 昆明・西双版纳他	
61年（1986）年		第1回（5月20日～5月30日）
62年（1987）年	第2回（7月11日～7月21日） 昆明・西双版纳・思茅他	
63年（1988）年		第2回（8月5日～8月14日） 特例：思茅の岩宰氏来日 （6月10日～6月19日）
平成1年（1989）年	天安門事件のため中止	
2年（1990）年		第3回（8月30日～9月9日）
3年（1991）年	第3回（4月26日～5月8日） 昆明・西双版纳・思茅	
4年（1992）年		第4回（8月13日～8月23日）
5年（1993）年	中国側の事情により中止	
6年（1994）年	第4回（3月23日～4月4日） 昆明・紅河・文山	第5回（8月1日～8月11日）
7年（1995）年		特例：劉金吾氏来日 （1月20日～1月27日）
8年（1996）年		
9年（1997）年		第6回（3月20日～3月30日）
10年（1998）年	第5回（3月30日～4月8日） 昆明・文山	第7回（3月6日～3月26日）
11年（1999）年		第8回（6月23日～7月3日）
12年（2000）年	第6回（5月31日～6月11日） 昆明・麗江・中甸・大理	

2001.3.31 現



中甸県チベット族の女性 云南科技出版社（秘境香格里拉）より転載

財団法人

黛民族舞踊文化財団のあらまし

財団法人黛民族舞踊文化財団は、我が国伝統の民族舞踊を舞台芸術として確立し、その普及向上を図るとともに国際文化交流を行うことを目的として、昭和61年3月文部大臣から設立を許可された団体です。

財団設立後は、(1)民族舞踊普及向上のための中央における公演をはじめ、地方巡業公演を活発に行ってひろく一般にこれを紹介し、また研究成果の発表会等を開催し、(2)後継者の育成を目的として民族舞踊の研究者（音楽、振付けを含む）、舞踊家のための研究会、研修会等を開催して創作活動を奨励すると共に技能の向上を図り、(3)日本各地および中国・韓国・東南アジア諸国の民俗芸能を取材し、その研究を行うと同時に収集した資料を整理保存して一般にこれを提供し、将来は資料館を設立して一般の利用に供することを計画しています。また、(4)世界各国にはそれぞれ

民族舞踊団が国家の庇護のもとに活動していますが、これらの舞踊団との交流や、中国・韓国・東南アジア諸国の民俗芸能伝承者たちとの交流等、幅ひろい国際交流を推進して相互の連携を研鑽につとめ、(5)民族舞踊、民俗芸能に関する資料および研究成果等の出版物を刊行して、民族舞踊に対する理解を深める目的達成のため、年次を追って事業を充実していきたいと考えております。

しかしながら、事業を発展充実させていくためには、何と申ししましても経済的基盤を確立する必要があることを痛感いたしております。

当財団が、真にわが国を代表する民族舞踊の振興団体として育ってまいりますよう、財団の事業目的をご理解くださり、各界の方々の御支援を心からお願い申し上げる次第です。

つきましては、当財団には賛助会員規定を設けておりますので、皆様にはぜひ賛助会員として、会費により御支援を賜りたく、お願い申し上げる次第です。

民族舞踊文化 No.13

2001年5月14日発行 発行人 犬丸 直 編集人 大野 晃

〒107-0052 東京都港区赤坂3-10-3 黛ビル4F Tel 03-3583-3633(代)

財団法人 黛民族舞踊文化財団

Fax 03-3583-3639

THE MAYUZUMI FOUNDATION FOR TRADITIONAL FOLK DANCE

MAYUZUMI BLD 4F, 3-10-3, AKASAKA, MINATO-KU, TOKYO